

早稲田大学環境総合研究センター・ふくしま広野未来創造リサーチセンター
第8回運営会議
議事メモ

日時：2018年9月14日（金）15:00～17:50

会場：福島県立ふたば未来学園高等学校（B棟2階・福祉実習室）

記録：山田美香＋李洸昊

出席者（敬称略）：

松岡 俊二	早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長 早稲田大学アジア太平洋研究科・教授
小松 和真	福島県広野町復興企画課・課長補佐
根本 賢仁	NPO 法人・広野わいわいプロジェクト・理事長
磯辺 吉彦	NPO 法人・広野わいわいプロジェクト・事務局長
島村 守彦	いわきおてんと SUN 企業組合・事務局長
菅波 香織	未来会議・事務局長・弁護士
藤城 光	未来会議・デザイナー
南郷 市兵	福島県立ふたば未来学園高等学校・副校長
石川 由佳子	福島県立ふたば未来学園高等学校進路指導部
松本 昌弘	福島県檜葉町建設課都市計画係・主任主査
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科・教授
岡田 久典	早稲田大学環境総合研究センター上級研究員・W-BRIDGE 副代表
永井 祐二	早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授
佐藤 公則	デロイトトーマツ
鵜沼 達郎	デロイトトーマツ
村川 夏実	デロイトトーマツ
松島 武司	（一財）福島イノベーション・コースト構想推進機構

事務局

李 洸昊	ふくしま広野未来創造リサーチセンター事務局
山田 美香	早稲田大学アジア太平洋研究科・博士後期課程

1. 第2回ふくしま学(楽)会のロジスティクス

全体的には特に大きな問題はなかった。以下の諸点は、今後、改善や検討が必要である。

- ・学（楽）会の開催時間については、テーマの数が4つであったため、長くなった。次回からは少し絞った方が良くかもしれない。
- ・テーマ1と2の順番の入れ替えは少し気になった。学（楽）会のプログラムにあわせて、自分が聞きたいところで参加される方々もいるため、可能な限り元々予定したプログラム通り進める方が良い。
- ・参加者数に対して会場がやや狭かった。次回はアクセスの配慮を含め検討した方が良い。
- ・参加者数は80名であったが、地域住民など一般の参加者を増やす工夫が必要である。

2. 第2回ふくしま学(楽)会の各テーマの議論の到達点と今後の方向性

テーマ1: 今、福島で取り組んでいること(まちづくりと住民参加)：小松和真

町の職員という立場に拘ってしまい、広野町というのが前面に出てしまったところがあった。広野町の議論なのか、双葉地域の議論なのか定まっていなかった。RCとして2～3年後の広野町ということを考えてもいいが、それよりも広域的な観点や長期的な観点が必要である。広野や檜葉は10年後～20年後に人が戻ってくる可能性は高いが、その他の地域はあまり戻らない。復興事業が20年後あるいは30年後どうなっているのかを考える必要がある。

行政の立場としては、若い世代が戻って住める環境づくりを課題としている。浜通りの北の地域も、外から多くの人が入ってきているだろうから、広野と同じような問題意識はあるようにも感じる。ただ、元々の広野町の居住者と新しい移住者をどのように調和させるかは課題である。

また、第2回ふくしま学（楽）会を通じて、テーマ1が具体的に何をしていくのかに関してもまだはっきりしないところがあるため、今後もう少し具体化させたい。

テーマ2: 今、福島のめぐみを活かすこと(農林水産業の再生と風評問題): 大手信人

安全は確保されているものの安心が届けられておらず、双方向のコミュニケーションが重要である。単なる一方からの発信ではなく、対面のコミュニケーションの機会を創ることが必要である。その例の1つとしてのオーガニックコットン事業は、首都圏の人々とのネットワークが重要な要素であることがわかる。また、有機農業という新たな付加価値で、福島の農業を新しいアプローチで進めることが、次のステップへ進む弾みになる。ただ、風評被害だけではなく、農業では、担い手の問題という日本の農村にある普遍的な問題もある。

農林水産業は一括りにするのは難しく、例えば漁業においては、本操業への移行は政府の魚種制限がなくなるタイミングである。農林水産業のそれぞれはダメージの様態が異なり、復興の進捗・方向性も異なる。農林水産業は、収入だけでなく「生活の場」の側面があり、この点を帰還政策においても考慮する必要がある。

里山と農業を分断して考えることができないにも関わらず、今までの復興政策において農業と森林との関係性についての視点や配慮が欠けていたことが指摘できる。そのことから、学（楽）会での役場―住民―研究者での話し合いの場は貴重であり、他の地域（飯館など）にも広げられればと期待し、地域社会の存在意義として認識されるような取り組みも必要である。

今後は、具体的に地域の自立（律）を考える時、流通・消費の分布を検討することが必須であり、地産地消の範囲をどう設定するのかも考える必要がある。また、一次産業従事者との対話の場が設定できるように試みることも重要である。



テーマ3: 今、福島から考える未来のこと(再生可能エネルギーとスマートタウン): 永井祐二

高校生からは創エネに取組み、その難しさを実感し、檜葉町や広野町の地域特性を生かした創エネを推進したいと報告があり、福島県が何故再エネ発電に取り組むのかという問いかけがあった。地域団体からは、売電ではなく自分たちで使う再生可能エネルギーを手作りにこだわり、発電活動によって電気をつくる意義が強調された。その意義と実践の経験を共有し、地域の課題にチャレンジすることで創意工夫が生まれることを実感した。

また、小田原市の団体からは、小田原市民による、小田原市民のための、ご当地電気という地域電力の紹介があり、エネルギーの地産地消が地域の経済循環を守ることに繋がり、一次産業と繋げることは一次産業の維持にも繋がる事例を学んだ。コミュニティパワー3 原則（地域による所有、地域による意思決定、地域への利益還元）に則し、熱供給から行政サービスも提供し、地域の持続性を確保するドイツのシュタットベルケのような、外部のリソースに過度に頼らない災害に強い社会という理想の姿が見えてきた。

今後、第3回に向けて地域で取り組む発電事業を活用した新しい地域社会の構築の取組みを福島復興にも取り入れ、新しい地域社会、真のスマートタウンを創っていくべきであり、広域連携の地域のサイズも含め、見極めの方向性に持っていきたい。

テーマ4: 今、福島について知りたいこと(1Fの事故処理と汚染水問題): 菅波香織

高校生からは、住民対話や六ヶ所村視察を経て、専門家が選択肢を示し住民が決める、住民の主体性が示された。今は、国が決めてしまって市民の入る余地がなく、市民の関心が無くなっている。中央省庁職員からの「情報量の差」が意思決定に関わっているという発言は、非常に残念であるが、対話をするには信頼関係が重要であり、市民からの働きかけが必要であり、生活者としての、市民としての意見が発せられる対話の場の形成をしていきたい。

テーマと関連する処理水の説明・公聴会に参加して、さらにその思いは強くなった。説明・公聴会では、プロ市民も国もお互いに聞く耳を持たず、あまり議論にもならなかったことは非常に残念である。国側に問題があるだけでなく、市民側にも問題があると感じた。市民側は被害者意識からか、暴言とも受け取れる発言やヤジが横行していた。

公聴会はやり方の問題もあり、今後は双方向のコミュニケーションの場づくりとして市民から対話の働きかけをやっていかなければならないと考えている。そのためには、浜通り全体を捉える大きなビジョンを描き、市民で合意し、そうすれば処理水をどうするかということも見えてくるのではないかと思う。

このような観点からテーマ4は、まちづくりということからテーマ1との結びつきは強く、さらに、風評問題の側面は生業の観点からのテーマ2とも関連する。また、太陽光パネルの町並みを我々は眺めたいのかということから、テーマ3との結びつきもある。このような4つのテーマを全部関連させ、住民の意見を反映させる場が最も重要だと考える。

デロイトトーマツ: 第2回ふくしま学(楽)会・テーマ1~4を踏まえて(佐藤公則)

互いに意見を出し合うポジティブな議論は関係者の巻き込みには欠かせない取組みであり、非常に刺激的であった。地元の高中生や働く若い世代からの意見は貴重であり、有識者の丁寧な説明やなげかけは、参加者に安心感を生み発言しやすい雰囲気づくりに繋がったと思う。ただ、どのような意見を求めているのか、テーマによってはディスカッションの意図が伝わり難いものもあり、次回は、明確に提示すればさらに活発な対話が期待できる。また、どのような経済循環をつくっていくのか、産業振興観点の議論が加わると、より広いアクター（特に、事業者）の参加を促し、テーマ探究が深まると感じた。

3. 第3回ふくしま学(楽)会の位置づけ、役割などについて

福島復興における重要な課題を4つのテーマ（テーマ1：まちづくりと住民参加、テーマ2：農林水産業の再生と風評問題、テーマ3：再生可能エネルギーとスマートタウン、テーマ4：1Fの事故処理と汚染水問題）を設定し、幅広く議論できた点は評価できる。それぞれのテーマで重要な論点が提示されたと考えられるが、リサーチセンターが元々意図していた論点を絞ることはまだ至っていない。しかしながら、今回の学(楽)会で、今までリサーチセンターが強調してきた長期的で広域的観点からのアプローチが重要であることは確認できた。長期的で広域的な観点からのアプローチにもレベルがあり、例えば、広域連携のレベル（自治体間の連携など）の可能性を検討するためこの2日間の視察・訪問を行ったが、相馬市・富岡町・楡葉町とも必ずしも積極的な反応はなかった。

広野町で芸術祭によるまちづくりの検討もあるようだが、それを実効性のある効果的なものにするためには、住民をいかに取り込んでいくか、住民の関心は何か、何を必要としているか、という点も

同時に考える必要がある。行政経営と地域経営は異なることを重視する必要がある。

また、双葉8町村は、類似な事業をバラバラやっており、効率的な側面からでも良くないと考えている。このような点からでも、これからはどのようにすれば双葉8町村がまとまるのかを考慮した方がいい。特に、町民の関心をどのように地域観点まで広げられるのかが重要である。その意味では、地域の方をもう少し増やすことも必要である。

本学（楽）会の独自性・特異性を活かすためには、やはり4つのテーマを全部考慮する必要があり、今後も4つのテーマを維持していく。次回の第3回ふくしま学（楽）会に向け、ワークショップ、運営会議を通してテーマの連携・絞り込みを図り、議論を継続していきたい。

4. 福島イノベーション・コースト構想・学術研究活動支援事業採択大学との連携について

今回、20事業が採択されたが、採択された事業が本プロジェクト以外は工学・農学分野が多く、また各対象地域だけに焦点を当てており、福島復興を全体的に考えるよりは、バラバラ感が非常に強い。しかし、学（楽）会が設定している4つのテーマとの関連性がある事業も多いため、広域的な観点からでも他大学との連携は重要であると考えている。

大学等の「復興知」を活用した福島イノベーション・コースト構想促進を念頭におき、福島復興における「知の集積」を意識しながら、社会的側面を配慮した研究での成果を上げられるよう研究を進める。

5. 福島県浜通り地域のベースライン調査計画（デロイト トーマツへの連携も含めて）

デロイト トーマツは広域連携の現状把握の側面から、被災12市町村の共同の取組みと特に水道事業に関する報告があった。福島県の水道事業においては、補助金、賠償金等で成り立っており、給水収入だけでは総費用を補うことはできていない。効率性の側面も含め、今後の広域連携のあり方を議論していくことにした。その議論を進めるための具体的なベースライン調査についても今後調整していくことにした。

6. その他

- ・RC（連携地域、招聘研究員など）の拡大については継続して検討する。
- ・デロイト トーマツが計画している「学生向け研修プログラム」についても今後調整していく。

7. 今後のスケジュール

2018年

10/5（金）15:00-17:00	（テーマ2）大手先生との打合せ@早稲田大学
10/19（金）	第9回運営会議
10/26（金）（予）	RCメンバー間打合せ
11/2（金）	（テーマ3）ワークショップ（専門家・他団体や福島復興学WS採択大学等との連携）
11/16（金）	（テーマ2）ワークショップ（専門家・他団体や福島復興学WS採択大学等との連携）および第10回運営会議
12/14（金）	第11回運営会議

2019年

1/18（金）	第12回運営会議
1/27（日）	第3回ふくしま学（楽）会

※デロイト トーマツの学生向け研修プログラムは調整中

- ・事業者と行政における地域課題の把握とそれに関する解決策を座学にて学習。
- ・現地でのフィールドワークを行い、学生の実践力を高めると共に、地域との深い関係性を築き、良質な関係人口の増加を目指す。

以上